

幕内瓦版 第拾参号

電子版

発行 日本劇場技術者連盟



幕内：劇場の幕内側のことで、演者・大道具・小道具・衣装・照明・音響など、舞台を創造するものの総称

■劇場技術者の「震災後」

東日本大震災により直接、間接的に影響を受けた劇場は多いと思います。また、電力需給の逼迫を受け、計画停電が実施されました。そして、今夏は東北、東京電力管内では、電力使用制限令が発令されたことにより、日本中で「節電」が叫ばれ、みなさんの劇場にもさまざまな影響があったと思います。

そこで、みなさん劇場技術者の震災後を、去りゆく夏と共に振り返ってみたいと思います。そこから、明日への糧になるものが見出せることを期待します。

■震災後の状況 東京都 五十嵐 功太郎

震災時の対応や防災面の見直しで、あっという間に夏も過ぎました。

私事ですが、いわき市の親類5世帯20人近くが避難先で新しい生活を始めました。身近に影響があると感じ方が違うようで、催物があるこんなことをしていていいのかなと思う時期もありました。

収益面ではそろそろ震災影響が言い訳にならない雰囲気も出てきました。設備的には震災被害は軽微で、壁のひび割れが多くなった程度ですが主催側の開催意欲や、節電を考えると催物開催には抵抗感といった雰囲気があり、営業面・収支面にはかなりの痛手です。演出的な抑制などの為に催物単価は下がる一方です。

自分の小屋は民間の多目的ホールで儲けなければなりません。それでも有り難いことに定期的な催物は大半が継続開催しています。

催物の企画意欲・開催意欲が盛り上がるような雰囲気に早く戻って欲しいと思います。自分の足下がぐらついては、何もできませんね。今年空いたところに新しい催物が埋まれば、次に進めます。今はそう考えて毎日過ごしています。

■節電について思うこと 福井県 山下 祐治

3月11日の東日本大震災に被災された皆様、被災された会館の関係者の皆様には心よりお見舞い申し上げます。

震災によって引き起こされた「福島第一原発事故」を受けて、東京電力管内はもとより、全国で節電一色になりました。私の勤務するホールでは、エネルギー消費の節約に加えて、経費節約の目的から電気ポット電源の常時入れっぱなし禁止、パソコン電源のスリープ状態放置禁止などの措置が取られました。過剰といえば過剰なのかも知れませんが、当たり前で電気を使っている現在が、当たり前ではないことを改めて感じています。

自宅では家族が普段からエアコンの使用をあまりしていないため、日中は自然の風と扇風機で過ごしていますが、だからなのか体調は悪くなりませんし、他の人に比べると不快な暑さをあま

り感じなかったように感じ、今の日本の過剰な電力消費社会が果たして豊かなのか疑問です。舞台照明はどうか、という話にもなりますが、演出照明にあまり節電意識を持ち込むのは難しいと思いますが、日々のクラシック公演などに関しては、支障のない程度に点灯スポットを減らしたり、ゲージを下げたりしています。

このような折に読んだ本に書いてあったのですが、日本の家の明りは明るすぎる、ということでした。東京などの都会では、街の明かりや駅などで消灯しているライトが目立ち、いくらか暗めであった、という話を聞きます。それでもきっと明るいのだと思いますが、海外の街では薄暗いオレンジ色の明りが街の雰囲気をよく演出していて心地よいです。

このような大災害をきっかけにするのはどうか、とも思いますが、単なるエネルギー消費の節約目的だけではなく、暮らしの中でもあまり明るすぎない、そして自然を利用する生活を心がけて心地よい生活空間作りを自分なりに考えてみると、結果的に節電にもつながり、自分の身体にも良いのかな、と感じています。

■ 震災後を振り返って 神奈川県 高橋 幸広

震災から丁度半年となり、やや冷静に震災の影響を判断できる時期かと思います。そこで、思いつくことを整理して記してみます。

まず、マイナス面では、地震による施設の損傷があったこと、地震と計画停電により、公演が中止・延期になりお客様に迷惑をかけたこと、また、それにより売上げが減少したことです。

一方、プラス面としては、地震時の対策の見直しができたことです。例えば、地震時の行動マニュアルがより実際的になったことです。今回の大きな地震により、実際にはどのようなことが起こるかが分かり、マニュアルの精度が上げられました。

また、計画停電や電力使用制限令により、節電ひいては省エネ対策が進んだことです。これには、来場されるお客様が、ロビーやトイレの照明の間引き点灯に気持ちよく協力してくれたことも大きいと言えます。また、空調温度設定を以前より高くすることに、職員及びお客様も抵抗が少なくなりました。省エネ意識が高まったと言えます。

そして、これからの劇場技術者の仕事の展望ですが、以上のようなことを踏まえ、以前より一層、簡素でありながら効果の高い演出方法を創造すべきかと思います。そこで、日本劇場技術者連盟で実施されている劇場技術者検定にも、その役割を期待したいと思います。

そして、より大きな観点から考えねばならないことは、地震そのものの影響は減少しますが、未だに放射能の問題が大きく残っていることです。これが、日本社会・経済に大きな影響を与えることは間違いありません。そこでは、地震直後よりも、文化的活動の意義が問われるのではないかと思います。日本人にとって必要な「文化」とは何かが問い直され、劇場での公演内容も大きく影響を受ける可能性があると思います。個人的には、日本の伝統芸能を活性化させる取り組みが重要になると思います。

私たちも、地域から始めて、日本人にとって必要な「文化」を劇場技術者として考えたいと思います。

■ 節電対策とその効果～デマンド監視装置の薦め 群馬県 平野 克明

私の劇場でも、東京電力、自治体や自家用電気工作物点検を委託している業者から、節電に関する要請や調査がありました。それに基づき、デマンド値（最大需要電力）を前年の実績から1

5%減らす目標値を設定しました。

このデマンド値というのは、ご存知でしょうが、高圧受電の需要家において、30分ごとに計測された電力使用量の平均値のうちの最大値(kw)のことです。いわゆる契約電力というもので、これにより、基本料金が算定されます。(※当然、現在より低い値なら料金が安くなるが、超えてしまうとその値はその後11ヶ月適用され、高い料金を払わねばならない。)

その目標達成のために、最も貢献したのは、「デマンド監視装置」でした。これは、目標とするデマンド値を設定し、それを超えそうになると、警報が鳴り注意を喚起します。具体的な使い方としては、警報が鳴ったら、デマンド値を超えないように、電気の使用量を抑えるようにします。当然、催し物を行っている時＝照明のスポットライトを多用する演出のある時、しかも、夏場ですから、ホール空調機はもとより、劇場内の多くの電気設備機器が稼働しているときに発報します。そのような時、催し物やお客様に影響の少ないところから、事前に設けた優先順位に基づき、電気設備機器を落としていきます。たとえば、当劇場では、事務所の空調機、控室空調機など電気使用量の大きい空調機類が効果的です。

結果として、7月、8月共目標値を大きく下回る実績で、大変満足しています。

それから、このデマンド監視装置のその他のメリットとしては、30分ごとのデマンド値や電力使用量などが、管理する業者から、一覧表やグラフに整理され、資料としてもらえることです。これにより、どの公演のどの時間にピークが出たのかが分析でき、節電対策を立てる際に非常に有効です。また、事務所に設置された監視装置にはそのときのデマンド値が表示されているので、電気機器をこのくらい使用すると電力使用量はこのくらいなのかということも、ある程度把握できるので、便利であります。そして、常に数値で確認できるので、「電気が見える」感覚があり、これが節電意識には大変役立ちました。

若干のレンタル料金で済みますから、未設備の劇場には、導入を是非お勧めします。

今夏の電力供給の逼迫から始まった厳しい節電への取り組みでしたが、劇場内の電気設備機器の負荷容量を調査し、使用方法などを工夫することにより、節電はもとより、電気料金の削減もできました。そして、それらの努力により、副次的な効果として、さらに劇場の設備管理に対して、深いノウハウを得ることができたように思います。

■連盟会員の新鮮便

■劇場技術者の「まちづくり」 茨城県 阿部 喜一

「小美玉市まるごと文化ホール計画」がまとまってきました。(以下、前文より抜粋)

小美玉市の文化ホール3館を拠点に、まち全体の元気をどんなふうにつくっていくか。そして10年後へ向けていかに伸ばしていくか。それを考えたのが「小美玉市まるごと文化ホール計画」です。

住民リーダー12名と館職員7名がプロジェクトチームを作りました。

2年間の活動を通じて辿り着いたビジョンは「根を張ってこそ花が咲く」です。人の根を張れば、まちの幹が伸び、文化の花が咲く、そんな文化活動にしていくことが「持続可能な豊かな文化のまち」の実現につながると考えています。(以上)

この計画の中で、いままでの活動がモデルケースとして取り上げられています、私が関わってきたのは地元の中学校の演劇部の育成です。

私は演劇の素人ですが、技術的な側面から舞台監督的なサポートをしています。中学生の部活ですからクオリティーは求めず、全員が演劇を通して満足感を味わってもらえれば、という想いで取り組んでいます。

振り返れば8年近くかかわってきましたが、やっと最近になって卒業生がボランティアスタッフに入ってくれるようになりました。おそらく、この子たちも大学へ行けばこの地を離れ、疎遠になると思います。しかし、またふるさとに戻ってきたときに、この劇場に来てもらえればいいと思っています。

部活の最初に教えるのは「みんなが将来、結婚して子供ができたら、その子供を連れてまたここに遊びに来い」ということです。

この気の遠くなるような取り組みを、劇場技術者としての「このまちの文化への係わり方」のひとつとしています。

業者という立場のせいか、ハードスケジュールに配慮していただいてか、プロジェクトメンバーにお誘いいただけませんが、住民や職員のみならず同じ目線に立って「文化のまちづくり」ができる劇場技術者になりたいと思っています。

■様々な出会いに感謝 島根県 桑原 基紘

私は人口数千人といい小さな町にある公共文化ホールの管理・運営を行っております。この町に来て約8年になりますが、当地でいろいろと勉強させていただいております。

8年前まではいわゆる“都会”と呼ばれる街に住んでいて、現在の職種と全く違った仕事をしていたのですが、縁あって当地へ来て舞台業務を一から学ぶことが出来たことに大変喜びを感じております。それは学ぶ過程で舞台業務の師と出会い、地域住民と出会い、舞台業務以外でも教わるが多かったからです。

これからも舞台業務以外でも実りある経験が積めるよう今後一層の努力をし、多くの人に癒しを発信できる文化ホールの管理・運営ができるよう舞台業務に従事していきたいと思っています。

■バイオリンの名器が、東北の伝統芸能の復興基金になった 東京都 八板 賢二郎

日本音楽財団所有のバイオリンの名器ストラディバリウスが6月20日、ロンドンで競売にかけられ、約12億7500万円で落札されました。収益の全額は日本財団に寄付され、被災地の伝統芸能を支援する基金を設立し、震災で失われた祭りの山車や伝統芸能の道具の製作費などにあてられます。

西洋楽器を手放し、日本の伝統芸能の復興に充てるとは皮肉のようですが、とても素晴らしいことです。

伝統芸能は日本の芸能の原点ですから、嬉しい限りです。

一週間前、宮城県から上京した知人たちと歓談したときのこと、「東北は民俗芸能の宝庫で、民俗芸能は被災者たちが演じ、それを被災者が見物して元気の起爆剤になるのだから、どんどんやるべき」と進言したところ、「道具が流されてしまった」という返事でした。「文化庁は、一部の演劇人の救済事業ばかりしていないで、自らも無形文化財に指定している民俗芸能の復興に国

税を注ぎ込むべきだ。でも民間の支援のほうが早いかも・・・」などと言って別れた矢先の朗報でした。

さまざまな知恵が、被災地に注がれています。
東北の若者を採用する企業も増えてきました。
これからが本物の慈善が見えてくるのです。

■富山県開催のセミナー「日本で演じられてきた演劇」に参加して 宮城県 小松 正俊

9月13日、日本音響家協会北陸支部主催の音響家のための教養セミナー「日本で演じられてきた演劇」に参加して来ました。

今回のセミナーは、昨年新宿文化センターで行われた、日本劇場技術者連盟のセミナーに参加した北陸支部長の山本広志氏、岩崎証意氏と西畠理氏の3名が舞台に携わる者として、技術的な知識だけではなく、舞台に関する歴史的なこと、演劇に関すること、音楽に関することについて造詣を深めることはとても大切なことだと痛感し、是非このセミナーを北陸支部で開催したいとの思いにより開催されました。

今回のセミナーは、型にハマったことはしない、という山本支部長の方針により富山県割山森林公園、天湖森（てんこもり）キャンプ場内のログハウスを借り切って、八板賢二郎講師を囲み参加者は各自リラックスしながらの受講となりました。

「日本人は雅楽等を『左脳』で聴くのでどうしても眠くなるが、西洋人は『右脳』で聴くので眠くなるどころか逆にギラギラしてくる」という大変興味深い話と、「舞台は非日常の世界。舞台は虚を本物に見せ、映像は本物を虚に見せる」という話しがあつてから、講義がスタートしました。

日本の芸能の基礎となっている「雅楽」の概要、楽器、舞楽と大変判りやすく解説していただきました。続いて、能楽、人形浄瑠璃、歌舞伎、オペラ、そしてミュージカルとご自身のスタッフとしての関わりや体験談を交えながら講義していただき、あつという間の大変充実した貴重な2時間を過ごさせていただくことができました。

セミナー終了後、近くの温泉「楽今日（らっきょう）」で汗を流し、バーベキューを囲み、北陸の美味しい魚介類や山本支部長の家庭菜園で採れた新鮮な野菜を肴に盛大に懇親会が開催されました。懇親会では、「三線」の演奏も楽しみました。また、地域の伝統芸能等々「音」意外の話題も多く、大変勉強になりました。

今回のセミナーを受講して学んだことは、技術的な知識以前に劇場で働く者、舞台に携わる者として当然知っておかなければならない大切な基礎知識であることを確信しました。しかし、このような中身の充実した研修やセミナー等は、公文協等でも開催されていないのが現状であり、劇場で働く多くの人々が学ぶ機会がありません。劇場技術者検定同様このようなセミナーが、私の住む東北の地でも開催されるように取り組んで行きたいと思っております。

■製作現場を見に行こう「衣裳編」宮本宣子ワークショップ見学と交流会を開催

去る6月13日（月）に宮本宣子さんのワークショップ（製作現場）見学会を開催しました。

演劇はもとよりテレビや映画など幅広い分野の衣裳デザインで活躍されている宮本宣子さんとスタッフの山下さんから実際に舞台などで使用される衣裳を見ながら、衣裳デザインについての興味深いお話を聞くことができました。これにより、衣裳デザインとはどのようなものであるかと共に、その重要性を理解することができました。

見学の後、下町情緒あふれる谷中銀座を散策し、その一角にあるおいしい地鶏料理屋で交流会を楽しみました。そこには、宮本宣子さんと山下さんも参加され、さまざまな興味深い話を聞くことができました。

※連盟 HP もご覧ください。

●参加者の感想

◎今回、宮本宣子さんのワークショップの見学をさせていただき、衣裳製作の過程、衣裳というお仕事、役割というものを深く知ることができました。また、実際の衣裳の保管場所やデッサン、衣裳も見せていただきながら、布探し、布選び、デッサンを描き、型を作るという過程についての説明を受け、衣裳製作の大変さを実感しました。

また、日本と外国との衣裳を作る上での考え方やイメージの違い、衣裳さんとしてのこれからの舞台の在り方や改善点など生の声を聞くことができ、とても貴重な体験となりました。

（千葉商科大学／渡部 未沙）

◎宮本宣子先生のワークショップ見学会に参加させていただきありがとうございました。被服製作には興味があったので参加する前からとても楽しみにしていました。

作業場は私が想像していた、工場のような切羽詰まった雰囲気とは違い、皆さんが信頼し合って楽しそうに作業している印象を受けました。意外にも勤務時間に無理がなく、徹夜はしていないということにも驚きました。それでも作業内容はやはり大変そうに思えました。

学生の頃、授業の一貫で簡単なシャツやじんべいを作ったことがあり、一つの服を完成させる大変さは多少理解しているつもりでしたが、演出家や役者さんの要望に応じ、さまざまな時代や状況に合わせた衣裳を考え、デザインし、形にすることは大きなプレッシャーや根気のいる作業なのだろうと思いました。しかし、打ち合わせ後のデザイン変更等もある中、限られた時間で手間暇かけて作りあげた作品が役者と共に舞台にあがった時の感動は、とても嬉しいことなのでしょうね。

舞台には、客席から観ただけではわからない、裏方さん達の苦勞と努力がまだまだたくさんあることを知りました。

それほど舞台に興味が無かった私が、たまたま照明の仕込みを見せていただき、率直に綺麗だな、楽しそうだなとワクワクした気持ちの反面、今まで考えもしなかった客席からは見えない裏舞台で働いている裏方さんの大変さを初めて感じたことを覚えています。以前は気にもとめないで当たり前のように思っていた、舞台進行、音響、照明などの重要性や、裏舞台で表舞台を陰か

ら支える裏方さん達の熱意や努力を知るほどに、その奥深さに圧倒され興味がわいてくることを実感しています。

私は、裏方を手伝うようになって、今まで知らなかった舞台の本当の素晴らしさや楽しみ方を教えられたような気がします。駆け出しの私ですが、これからも皆様と共に舞台の楽しさや素晴らしさを体験して行きたいと思っています。

今回の見学会では、大変貴重な体験をさせていただきました。またこのような見学会があれば是非参加したいと思いますので、皆様宜しくお願い致します。ありがとうございました。

(宮城県／畠中 ひとみ)

■イベントのお知らせ

■ 第6回東海オーディオビジュアルメディア展示セミナー開催

今年も多数の音響メーカーが参加決定！もちろん、入場無料です。

詳細→ <http://www.ntw.info/semina/semina.html>

◎日時：10月7日（金） 午前10時30分～午後6時

◎会場：クリエート浜松（浜松市中区早馬町2-1）

◎展示出展製品やセミナーなどのお問い合わせは下記へ

ネットワーク株式会社 TEL:053-423-2400 E-Mail: info@ntw.info

■劇場技術者談話室 「映画館（ムービーシアター）の現況」

煎餅と蜜柑の香りとトイレの匂いは、50年も前の子供の頃の懐かしい映画館の思い出です。

無声映画で始まった映画は、サラウンドそして3Dへと進化を遂げています。

夏休みになると、映画館は子供で賑わい、大きなポップコーンのボックスを抱えて嬉しそうです。

さて、映画はフィルムからデジタルへと移行しつつあります。

したがって、その設備も必要です。

公共ホールの名画上映も、各地で開催されています。そのための設備更新は如何に。

映画館の設備施工に長年携わってきた講師が、映画館の過去、現在、未来を解き明かします。

◎日時：2011年10月17日（月） 15時～16時30分

◎場所：新宿文化センター・第3会議室

◎講師：渡辺一巳氏

●プロフィール

1971年に東芝ホトホーン（現コバレント販売）入社。

2011年3月まで映画館公共施設映写設備、商業演劇音響装置の営業技術を担当。

日比谷スカラ映写設備、展博大型映像装置、東宝スタジオ35ミリ映写機、

東宝系の演劇音響装置改修、レミゼラブルやミスサイゴンの機材等の納入等に携わり、

シアタークリエ新築設備も手掛けた。

◎参加費無料：事前登録要

◎申込先 teec.honbu@gmail.com FAX. 03-3991-6402

*定員になり次第締め切ります。

◎日本劇場技術者連盟主催

■ 地域住民のための快適な公立ホールをめざして

(埼玉県舞台技術協議会+日本劇場技術者連盟 合同研修会)

指定管理者制度の開始、そして東日本大震災を経て公共ホールの運営も大きく様変わりしはじめました。舞台技術者には、職場環境の変化に沿った進化が求められています。

そのような環境変化に対応するためのヒントが得られる研修会です。

◎日時：2011年10月27日(木) 11:00～16:00 受講者受付 10:30

◎会場：さいたま市民会館うらわ(旧浦和市民会館) 605号室

JR 浦和駅西口下車・徒歩7分

048-822-7101

アクセス <http://www.saitama-culture.jp/urawa/access.html>

埼玉県庁方向へ進み、埼玉会館手前を右に入り直進

◎内容：●第1部 対談(11:00～12:30)

『舞台進行の役目』

～マルチタスクで能率向上～

※「舞台進行」とは、劇場・ホール技術全体を掌握して、舞台機構・舞台設備の管理と操作を主な業務とし、主催者・制作者・演出者と連携しながら、舞台照明・舞台音響と協調して、円滑に劇場・ホールを運営する技術者のことです。

●第2部 シンポジウム(13:30～16:00)

『新時代の公共ホールの運営を考える』

～危機管理から利用者対応まで～

失敗しないための知恵をしぼる

◎対象：劇場・ホール管理運営従事者

◎参加費：500円(資料代として)

*埼玉県舞台技術協議会会員と日本劇場技術者連盟会員/会友は無料

◎参加申込先：埼玉県舞台技術協議会 事務局(10月17日〆切)

TEL/FAX 048-825-2347

e-mail: sbk@herb.ocn.ne.jp

◎主催：埼玉県舞台技術協議会+日本劇場技術者連盟

発行 日本劇場技術者連盟

発行人 齋藤 譲一

編集人 平野 克明

発行日 2011年 9月 22日

幕 内 瓦 版 第拾四号

電子版

発行 日本劇場技術者連盟



幕内：劇場の幕内側のことで、演者・大道具・小道具・衣装・照明・音響など、舞台を創造するものの総称

■第9回理事会報告

日本劇場技術者連盟第9回理事会が、2011年10月17日（月）午後1時から、新宿文化センター第三会議室において開催され、下記のとおり議決されました。

第一号議案 会費未納者の除名について

会費を2年間にわたり未納の3名を除名とすることを決定した。

第二号議案、セミナー等の開催計画について

担当理事から報告と提案があり、本年度後半のイベント開催を下記のとおり決定した。

- (1) 2011年10月17日、セミナー劇場技術者談話室「映画館（ムービーシアター）の現況」を開催。（羽田野晋嗣理事担当）
- (2) 2011年10月27日、埼玉県舞台技術協議会と共同開催のセミナー「地域住民のための快適な公立ホールをめざして」を開催。（五十嵐裕理事担当）
- (3) 2012年3月3日～4日、富山県新川文化ホールで、富山県公文協共催により第1種、第3種技能検定講座を開催。（山本広志会員担当）
- (4) 2012年2月、佐賀県で、第1種、第3者技能検定講座を開催。（出井稔師理事 担当）
- (5) 裏方教養講座「日本の音楽・西洋の音楽（仮称）」の開催。録音を聞かせながら劇場技術者の目線で易しく解説、3時間のプログラム。講師は三好直樹氏と八板賢二郎で、日程は調整中。（羽田野晋嗣担当）

第三号議案 連盟報酬基準について

一般的な協定料金ではなく、連盟としての受託料金として掲げることで、広く劇場技術者の報酬を確立することとして協議したところ、次のとおり決定した。

舞台進行、舞台照明、舞台音響

主任 50,000円

要員 35,000円

第四号議案 その他

◎事務局の作業について

会費納入の情報を速やかに会計に報告することと、現金による受け取りをしない

こととした。

◎事業の推進を円滑、迅速に進行するため、部署毎に受付メールアドレスを設けて、それぞれの担当者が使用することにした。

会報編集 teec.editor@gmail.com

劇場技術者談話室「映画館（ムービーシアター）の現況」報告

埼玉県 齋藤 譲一

去る 10 月 17 日（月）に、日本劇場技術者連盟の主催で新宿文化センター第 3 会議室において、映画上映に関する技術セミナーが開かれた。

講師は、映画が斜陽産業と云われた厳しい時代から平成の今日まで変遷する映画界で映写機に携わる機器の現場一筋で仕事をし、アナログ時代を知る渡辺一巳さんだ。

渡辺さんは、すでに解散を余儀なくされた全日本映画技術者連盟最後のメンバーであり、映画館のみならず、数々の名場面を上演したかつての新宿コマ劇場、開場 100 年を迎えた帝国劇場など商業演劇劇場音響の第一線で活躍されてきた。

今回の劇場技術者談話室のテーマは、「映画館（ムービーシアター）の現況」である。最初は「映画館の歴史」（昭和 30 年～平成 22 年）の 56 年間で全国統計した表をもとに私たち一般の素人にもわかりやすく丁寧に解説して下さった。

1956 年のコマ劇場オープンでは、70m/m の「オクラホマ」が上映されたこと、その後、急激に映画が隆盛し 1958 年には映画館が 7,000 を超え「紅の翼」「十戒」などで入場者 11 億 2 千 7 百 50 万に迫り最高を記録したこと、その後も「ベン・ハー」や「鉄道員」などの名作が次々とヒットしたが、テレビの普及もあり 1963 年の「アラビアのロレンス」のころは入場者が半分に減ってしまったこと、1993 年にはシネコンが上陸したが映画館数が最低に激減、その後入場者数も 1 億 2 千万を切り凋落を辿ったことなど、映画をこよなく愛する者として懐かしく述懐しながら語ってくれた。

また、映写機の取り扱いについては、ビデオ教材による解説が細かい作業まで取り入れられて大変解り易かった。

さらには、具体的に資料や図面を配布して下さい、「スクリーンサイズの違い」や「ドルビーサラウンドシステム」などの基礎知識を解説してくれた。実際に映画フィルムも見せて下さり、「各方式のサウンドトラック位置」を説明してくれた。

サイレント時代のフィルム縦横比、トーキーからフィルムの左端をサウンドトラックとして使うようになってスタンダード・サイズが確立したこと、ビスタサイズにはヨーロピアンとアメリカンの 2 種類があり、異なるスクリーン、サイズ比についても説明して頂いた。シネマスコープは洋画ではお馴染みの横に長いサイズ 1 : 2.35 であること、日本映画もアメリカン・ビスタの 1 : 1.85 を使用していることなどなどである。

さらに、音響システム関係に触れ、1975 年ミュージカル・トミーにてデモンストレーション上映されたドルビーステレオは全世界に普及し、ドルビー A, SR、デジタル、EX と進化していったことや、スピーカのレイアウトの進化までこと細かく説明して下さい。

ここまで聞くと、映画技術者のその時代変化や多種の上映方式に対応する技

術への奥深さが伝わってきて目が開かれる。その高い技術力を見事に駆使するプロフェッショナルさに同じ技術に携わる者としては、尊敬と感動の念が湧いた。

完成試写会のときに、制作スタッフから誉められることもあるが、フィルム上映への厳しい意見を出される場合もあるそうだ。現場の苦労など関係ない意見も出て困ることもあるが、「可能な限りの対応で何とかカバーする努力をする」と笑っておられた。

演劇の演出家のなかにも技術者の苦労が分からず勝手なことを言う人がいる。それでも何とかしようとする技術者の意地と悲哀が垣間見えて同感させられた。

人を感動させてくれる素晴らしい映画は、クリエイターだけでは存在しえない。映画館やホールで上映する現場での戦いが最後の勝負だったのである。観客からは見えない裏方である映画技術者のプライドと映画への熱い想いによって支えられて成り立っていたのだ。

さらには、映画館の将来と今後の課題についてもいろいろ話をして下さった。今後の公共ホールでの上映についての設備更新についての大切さについても多々考えさせられ、質問や意見が次々と飛び出して熱気がいっぱいの講演であった。

■ シンポジウム「地域住民のための快適な公立ホールをめざして」

の報告

群馬県 平野 克明

2011年10月27日（木）に、“さいたま市民会館うらわ”にて埼玉県舞台技術協議会と共同主催のシンポジウム「地域住民のための快適な公立ホールをめざして」が開催された。

第1部は「舞台進行の役目」と題し、松戸市民劇場の舞台進行を担当する福田義明氏をゲストに迎えて、八板副理事長と対談が行われた。

まず、八板副理事長から舞台照明及び舞台音響は役割と業務が確立しているが、舞台担当業務は曖昧なままであるので、最初に、その呼称からしっかりと決めて舞台担当の地位を確立していきたいという話があった。

実際、日本劇場技術者連盟では、劇場のいわゆる舞台担当として働く技術者を『舞台進行』と呼び、以下のように定義している。

『舞台進行』は、劇場・ホール技術全体を掌握して、舞台機構・舞台設備の管理と操作を主業務とし、主催者・制作者・演出者と連携しながら舞台照明・舞台音響と協調することで、円滑に劇場・ホールを運営する技術者のこと」

したがって、「舞台進行」というときは、上記の内容を意味していると理解していただきたい。

福田氏の勤務する劇場は、約300人の定員で、通常3人でホール技術業務を回しているので、舞台進行も音響・照明業務を手伝い、まさに、マルチタスクを実践されている。

また、ホールの利用料金が低廉なため、増員などは基本的にあり得ないとのこと。したがって、仕込み時間にも制約があり、常時音響卓にはワイヤレスマイクのセッティングを行い、照明において、基本吊りはもとより、リクエスト

の多いものは予め吊り込んでおくなどの工夫を行っているそうだ。

このクラスの劇場での催しは、舞台技術に関しては全く知識のない利用者が多く、打合せをしてもその通りにいかないことが多く、開演時間が異なったりすることすらあるようで、その対応は困難を極める。

それに対しては、利用者のレベルに合わせて、利用者の求めるものを提供することが重要であるとのこと。たとえば、カラオケ大会であれば、音合わせは出演者にその判断を委ねてしまうことも一策である。そこでは、プロからすればあり得ないような音作りで、プロの技術者の基準からすると許せないこともあるかも知れない。しかし、利用者が満足するものがそれなら、危険や機材に支障がない限り、それはそれでありなのである。

また、たとえば、しっかりとした PA 用のスピーカからの音より、フルレンジの安いスピーカの方が喜ぶ利用者もいるのであり、理屈通りのプロの基準や最新の高性能の機材が全ての現場で正解ではないのである。

快適な公立ホールを目指すには、このことが重要である。つまり、利用者の満足が第一なのであって、そこで働く技術者の自己満足ではないのである。

そして、そのような利用者の求めるものを精確につかみ取り、それにプロの技術のエッセンスを織り込みながら、わかりやすく効果的に提供していくことが、劇場技術者に求められていることなのである。

福田氏はこれらのことを「流れにまかせる」と言われた。大変心に響く言葉であった。

第 2 部は「新時代の公共ホールの運営を考える～危機管理から利用者対応まで～」と題したシンポジウムが開かれた。

パネラーは、舞台美術家の滝 善光氏、行田市教育文化センター責任者の伊藤勝仁氏、舞台監督の早船司氏、照明家の今野幸彦氏、亀有リリオホール 舞台担当（副支配人）の飯島正明氏、コーディネータは八板副理事長で、さまざまな立場から実体験に基づいた有益な話を聞くことができ、これまでとは一味違った内容のシンポジウムとなった。

まず、新人教育について各パネラーから以下のようなコメントがあった。

- ◎滝氏：舞台技術・設備機器は年々進歩しているが、ベテランの技術は固定化しがちである。ベテランも前向きに新しい技術を吸収し、後輩に伝えていくべきである。
- ◎飯島氏：新人がある程度育つと居なくなる状況があり困っている。また、舞台技術を「見る」ということができない＝本質を捉えて実践できない。
- ◎今野：ムービングや LED 機器の進歩が著しく、先輩もそれらの技術を積極的に吸収していく姿勢を持つべき。
- ◎早船氏：先輩がリストラされてしまったので、先輩に教えてもらえる環境は新人には重要だ。
- ◎伊藤氏：ホテルの音響業務から舞台音響の業務へ入ったので、年下から学ぶことが多かった。若い人から学ぶべきこともある。
- ◎八板副理事長：新人教育として、まず舞台袖に 1 日置いておき、舞台で必要な危険回避能力などを学ばせる。

このように新人教育ひとつでも、それぞれの立場からいろいろな意見が出され興味深かった。

本シンポジウムは、基本的に、八板副理事長の作成されたレジュメに沿って

討論された。このレジュメが秀逸で、危機管理や利用者対応の「ツボ」が、実にうまくまとめられている。連盟ホームページの報告にも一部掲載されているので、一読されたい。

たとえば、日頃の自覚しておくべきことで、「危険な装置は、『停止方法』を最初に習得」などは、当たり前且つ重要なことだが、意外になおざりにされていることがある。例としては、消防設備のスプリンクラーの止め方などだ。スプリンクラーは一度作動すると水槽の水が全てなくなるまで散水してしまうので、制御弁（アラーム弁）のあるところまで行って、手回しで止めなければならない。したがって、その場所と閉め方を事前に知っていなければならないが、周知されているだろうか？

また、地震時の対応で「揺れが収まってから避難誘導・・・？（客席天井の構造による）」という一文も重い意味を持っている。というのは、劇場の構造を専門家に聞いておくことや、耐震調査結果に基づき、客席は地震時にどの程度まで耐えられるのかなどを知っているべきだと言うことを意味している（実際、パネラーの滝氏は実践している）。したがって、劇場によっては、客席の方が安全であったり、否という場合もあるのだ。劇場技術者も建物の構造・設備について知っておくべきであり、そこから避難誘導などの方法も組み立てていかねばならないのだ。

実に多くの実地的な示唆に富むシンポジウムであった。

■連盟の報酬規定

理事会の報告でもお伝えしたとおり、日本劇場技術者連盟は、外部からの劇場業務委託を想定して、舞台進行、舞台照明、舞台音響の報酬を定めました。詳細は連盟ホームページでご確認ください。

URL → <http://www.teec-or.com/data/hoshuu.pdf>

連盟会員の新鮮便

■「ときめく」コンサートにて

北海道 坪田 栄藏

10年来サポートしているコンサートがあります。クラシック系のプロ・アマ、年齢も様々（どちらかと言えば高齢者中心）、技量も様々な出演者によるコンサートです。小編成や個人で活動しているアマチュアにとって舞台に上がる機会はあまりなく、そこへプロの演奏家の方々が地域の文化貢献ということで一肌脱いだのがきっかけで始まりました。

みんなまたとない機会に熱心に練習し、またこれを契機に再び楽器を持ち出した人もいます。本番の出来は関係なく、その一生懸命さは微笑ましい姿です。ちょうど「オヤジバンド」のクラシック版というところでしょう。

さて、一方で学生たちの中では吹奏楽コンクールで優秀な成績を納めている学校もあります。しかし、その学生の中には進学する際に「もう音楽はいいや」と辞めてしまう者も少なくないとか。それも小学生でさえいるらしいのです。

音楽は賞を取るためのものではなく、プロになるためだけでもないはず。それぞれの人生の楽しみであってほしいと思います。先のコンサートをサポートしていて、つくづく思います。

素晴らしい芸術家の演奏を聞くことももちろん大切ですが、このように音楽を続けている地域の人たちの演奏もぜひ聞いてほしいものです。このコンサートは「ときめきコンサート」と言います。まさに出演者が音楽していることに「ときめく」コンサートなのです。

■先日のイベント

スサノオホール 島根県 桑原 基紘

先日、施設周辺で実施された祭りに合わせて当ホールでも民謡大会が開催され、多くの人で賑わいました。当日は前日まで試行錯誤していた舞台転換もスムーズに行うことが出来て時間も予定どおり。お客さん出演者ともに喜びの声をいただき、とても安堵したのを覚えております。

余談ですが、照明さんのご厚意によりバラシ後にスタッフ全員でイノシシラーメンをいただきました。搬入口付近でラーメン。イノシシ！貴重な経験でした（とても美味）。

■久々の綱元

福井県 山下 祐治

先日、会社の仕事で同じ市内のホールへ行きましたが、そのホールは美術ボタンに加えて照明ボタンも手引き……。当然のことながら吊りこみ時、バラシ時にはバランスを考えつつの作業であり、日ごろ電動ボタンのホールに勤務しているため、少し頭を使う仕事でした。

おまけに看板・装飾パネルの吊りこみのウエイト管理、ボタン操作まで名指しされつつ行うことになり、「なんで〜！」と心の中で叫びつつ、一応照明チーフなのですが「はいはい！」とアップダウンを繰り返していました。

予想通り翌日には筋肉痛。久々の普通の小屋仕事で心地よい疲れの中、「ああ、そういえばボタン操作だけでなく、ドライアイスの準備〜操作もあったな……」と思いながら自分の筋力の低下を思い知らされました。

■「営利宣伝」区分を考える

茨城県 阿部 喜一

どこの劇場でも、施設使用料の区分で「営利宣伝」というものがあると思います。「営利宣伝」の判断基準は、みなさんどうしているのでしょうか。

私共では、「営利ではないこと」を説明するために、「参加者名簿」の提出を一つの基準としています。会社などが社員の研修会などで利用する場合を想定した方法で、不特定多数が対象ではないことを証明するものです。

しかし、名簿の内容を細かくチェックするわけでもなく、個人情報の問題もありますから、氏名だけでもいいのです。主催者のモラルにまかせているということになります。

また、ピアノやバレエの発表会などは文化芸術の支援・育成という解釈で名簿の提出は求めません。文化は巾が広いので、どこまでが文化芸術かという基準を決めるのは難しいようです。

この曖昧な区分で主催者は納得しているのでしょうか。公共施設なので、いたずらに刺激しないようにしているということも考えられます。

今でこそ非営利団体が存在しますが、自治体以外で劇場を利用するほとんどの団体が「営利団体（もしくは個人）」で「宣伝」が目的ではないでしょうか。

入場料の有無や金額での区分は比較的、明確にしやすいですが、「営利宣伝」は定義しにくいものです。そもそも、なぜ「営利宣伝」の区分を作る必要があるのでしょうか。

公共施設の料金は「受益者負担」の考え方によるもので、そこから収益を見込んでいるわけではないと思います。特に地方の劇場は、「地域の活性化」など、目に見えない効果を期待して税金を投入するべきだと思います。

ちょっと強引ですが、「営利宣伝」をなくしてしまったほうがスッキリすると思います。「入場有料」「入場無料」と劇場にあわせた「減免」があればいいです。

劇場技術者とは直接関係ないことですが、主催者に不信感を持ってしまったたり、行政の担当者が異動になると判断基準が変わってしまったりと、間接的には影響があるでしょう。みなさんのご意見や実例など、お聞かせください。

イベントのお知らせ

■第1種劇場技術者、第3種劇場技術者検定講座の開催

第1種劇場技術者と第3種劇場技術者の検定講座を下記の通り開催します。多くの方のご参加をお待ちしています。

日時：平成24年2月15日(水)午前10時から、2月16日(木)午後5時30分まで

会場：武雄市民文化会館小ホール（佐賀県武雄市武雄町大字武雄 5538 番地 1）

主催：日本劇場技術者連盟、宮崎県音響照明舞台事業協同組合、武雄市文化会館

後援：九州公立文化施設協議会、一般社団法人日本音響家協会

対象：◎一種/比較的シンプルで危険性の少ない舞台機構で、市民の舞台芸術の創造

を支える事業を主とした劇場等に従事する技術者

◎三種/劇場技術に興味を持ち、劇場運営を支援する市民

受講料：◎一種 12,000 円（教科書代 2,000 円込み）

◎三種 4,000 円（武雄市民は受講料無料、教科書代 2,000 円のみ）

申し込み・問い合わせ先： jjji3613@mbn.nifty.com

携帯 090-9077-7870 FAX：0986-36-4319

■裏方の教養講座『日本の音楽と西洋の音楽』

雅楽から浪曲までの流れ、クラシック音楽の誕生から現在の編成・様式までを、劇場技術者の目線で易しく解説。録音音楽を聞き比べながら進行します。

日時：2012年1月30日（月）13:30～16:45

会場：新宿文化センター 第1会議室

講師：八板賢二郎/三好直樹

受講料：2,000 円（連盟会員無料）

連盟からのお知らせ

■日本劇場技術者連盟ホームページの URL が変わりました

連盟ホームページの URL が下記のように変わりました。

新しい URL → <http://www.teec-or.com/>

■「日本劇場技術者連盟ラウンジ」が facebook に登場

facebook に日本劇場技術者連盟のページが、「日本劇場技術者連盟ラウンジ」として作成されました。気軽に書き込みをして、交流を深めましょう。

まずは、連盟ウェブサイトのトップページから「日本劇場技術者連盟ラウンジ (facebook で交流)」をクリックしてください。

■メールアドレスの登録のお願い

「幕内瓦版」などの送信のため、皆様のメールアドレスが必要です。まだ、登録されていない方は、メールアドレスの送信をお願いします。経費の節減になりますので、是非ご協力ください。

なお、皆様からの情報は、連盟の運営以外での利用はいたしません。

送信先アドレス → teec@pure.ocn.ne.jp

■会費納入のお願い

連盟の健全な運営のために、未納の方は、会費の納入をお願いします。

年会費 2,000 円の納入先は下記の通りです。名義は、「日本劇場技術者連盟」です。

◎郵便振替番号 00180-7-540744 (郵便局窓口で払込)

◎会費振込銀行 三菱東京UFJ銀行 練馬平和台支店 普通 0460959

■ご意見・ご要望をお寄せください

スタッフ一同、より充実した連盟の運営に努めておりますが、まだまだ至らないことがあるかと思えます。そこで、皆様からのご意見や要望をお寄せください。連盟のここが不満であるとか、このようなことをして欲しいということを下記のメールアドレスまでお願いします。もちろん、当瓦版への投稿も、随時お待ちしております。

送信先アドレス → teec.editor@gmail.com

発行 日本劇場技術者連盟

発行人 齋藤 譲一

編集人 平野 克明

編集委員 阿部喜一・小松正俊・桑原基弘・庄司 至・増田哲也・山下祐治

発行日 2011年12月1日

幕 内 反 版 第拾五号

電子版

発行 日本劇場技術者連盟



幕内：劇場の幕の内側のことで、演者・大道具・小道具・衣装・照明・音響など、舞台を創造するものの総称

■ 震災後1年を振り返って

東日本大震災から、早一年が過ぎようとしています。震災で大きな被害を受けた劇場を始め、地震の被害がなくても計画停電などで、催事に大きな影響を受けた劇場も多かったと思います。そこで、みなさん劇場技術者の仕事や生活に与えた影響をこの機に振り返ってみたいと思います。そこから、明日への光が見いだせることを期待します。

■ 震災後の課題と対応 東京都 新宿明治安田生命ホール 五十嵐 功太郎

正直なところ、「おたおたした」昨年の震災時とこの1年でした。

大きな災害・緊急時対応などの場合、小屋の所有会社と小屋の入居するビルとビル管理会社、自分の所属する会社との間の実際的な対応のギャップの大きさに驚き、これを解消する為にはどうしたら良いのか、ずっと考えてきた1年でした。

昨年の夏までは、いわき市に多い親類の安否・震災後の生活等を考えたりしてなんだかんだと落ち着かなかった気がします。

防災計画と実態論の見直しや防災資機材の準備や予算化などに加え、特に直近で「大地震が4年以内、70%、首都圏直下」などと言う報道もあり、気ぜわしい感じが抜けないうでいます。

LED球への交換作業は舞台側の照明機材は手付かずですが、ホワイエ・通路部等において、2～3年で交換出来るものについては進めて行く予定です。

ビル側省電力計画のハードルがかなり高い為、現在も省エネ対応は基本的には継続しています。

ビル側等との間で問題が出たのは、ホールの来場者対応における数の問題です。テナントとしては10名もいない施設ですが、利用者・来場者は400名超で計画しなければなりません。帰宅支援グッズや飲食確保では、この人数をビル側が負担し切れません。これを少しずつ予算化して、小屋負担とする計画です。

催物の開催意欲低下、開催実績も低下傾向が続いている中では、思うような予算化は難しい状況ですが、少しずつ揃えて行こうと思っています。

数年前から23区内の民間ホール数施設が集まり、直接の意見交換やメールでの情報交換を始めています。数有る施設の中で、似ている施設を探すのも実は一苦勞でした。ここで収集した回答は少ないのですが、地域的・施設特性、なにより民間施設という属性からは、とても勉強になる集まりと思っています。これからも積極的に顔を出して行きたいと思う集まりです。

当ホールとビル自体は昨年50周年を迎え、老朽化対策は現実味を帯びてくる頃と思っています。ビルの改修(建替)やホールの存続等、噂は飛び交う中でそれに流されると落ち着かないのですが、目の前の催物の進行や、この2～3年位の見通し感をしっかり

持っていたいなと思います。

■震災後 1 年を振り返る 島根県 スサノオホール 桑原 基紘

昨年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を受け、当ホールは省エネ行動計画書を作成して実施しました。震災に原発事故が伴い、電力の供給不足となったのを受け、身近に出来る節電可能項目を挙げ、昨年の電気使用量を 10% 下回るという目標の下、職員全員で節電意識を持って日常業務をこなしました。来館者の方々にも節電を呼び掛けようと張り紙を貼り、口頭でもご説明し省エネへの理解を求めました。この時は期間を定めましたが、それ以降も省エネ行動は続けております。

また、舞台や調整室などに、ここ 1 年で新たに導入したシステムはありませんが、避難経路や非常灯点灯などの確認といった日常点検項目に加えて、無停電装置の確認などの項目を自分の中で増やして点検するよう心がけるようになりました。

■震災後、1 年を振り返る 兵庫県神戸市 コスモシアター 山形 裕久

東日本大震災で、尊い命の炎が残念にも燃え尽きた方、未だ行方不明の方、

被災された方々に謹んでお悔やみとお見舞いを申し上げます。

負けるな日本・がんばろう!! 日本 United! We Stand.

3. 11 は東京での全国公文協の課題検討委員会による、仮称「劇場法」の検討会議に出席のため、新幹線で東京に向かっている途中駅間にて停車、車内放送で「東北地方で大きな揺れが…安全の確認のため停車します」との事。すぐさま携帯も JR ネットもパンク状態で繋がりません。車内の電光掲示板は「東北地方で大きな揺れを感知しました…」を繰り返すだけ。情報が無いままに 20:30 過ぎに駅舎に到着、構内のテレビで津波等の惨劇を見て絶句。幸いにも被害を免れた西行きの最終のぞみに乗車でき折返したが、大混雑と各停運行に変更で新大阪まで立詰めで、神戸の自宅にたどり着いたのは 26 時少し前でした。

ここで劇場技術者としてではなく、劇場で働く者としての視点で考えると、まず最初に何が何でも「自身の命と身体を守る事が最優先である」と自分は考えます。まず、自身の命があって、健全な肉体があって、次に、「観客」、「演者」関係者などに対して「待機・避難・誘導」の指示などを直接、あるいは、会館職員やスタッフを通じて伝えられるからです。自身が傷つけば、治療もしくは救助救出を待つ身になります。命を失えばなおさらです。そのためにまず、自身の身体を如何に安全に確保できるかだと確信しています。1. 17「阪神大震災」と 3. 11「東日本大震災」をそれなりに経験し、何処にいても「駄目な時は駄目」と。ただ 1. 17 以降自身で選んだサバイバル&エイドキットを常時携行するようになりました。

※ 5 月 24、25 日と鳥取県立県民文化会館で開催される「平成 24 年度全国公立文化施設協会 第一回定期総会・研究大会」において、「業務管理委員会」と「技術委員会」が合同で開く研究会の、テーマ：「公立文化施設における危機管理の再考～震災の教訓から学ぶ～」(仮称)にパネリストとして出演し、阪神大震災の体験から学んだことや提案を発表します。

■震災後に心がけていること 埼玉県 石山 富士夫

日本劇場技術者連盟に加入して数ヶ月ですが、研修会に出席する度に、あらためて舞台技術や危機管理、安全対策などに関して再確認ができ、大変有意義に感じております。当社でも現場に携わる全ての技術者に共通の認識を持ってもらうようにしております。

さて、震災後にそれまでと変化したところは、まず地震時の避難経路です。行政のマニュアル通りでは危険な部分を、現実には安全な避難経路に変更するように改善提案し、職員の方や利用者の皆様に周知徹底いたしました。常時ご利用いただく御客様にも、極力新しい避難経路を再確認していただいております。

節電対策ですが、催事のない場合、通路などは全て消灯し、勿論空調などは我慢できる限り、切るように心がけております。ただし催事の際は管理事務所とも協議をし、極力利用者の方や来場者の方に、負担が掛からないように、行き過ぎた節電をしないようにしております。ただし、照明であれば50%カットしても支障がないような場合などは、催事に応じて工夫はしております。

音響関係では、アンプラックが調整室のそばにありますので、利用形態に応じてアンプの個別電源を調整しております。その他周辺機器でも同様です。節電にもなりますし、機器の長寿命化にもつながりますので効果は大きいと思います。震災前以上に、こまめにチェックするように心がけております。

■震災でこんなことが 茨城県 阿部喜一

昨年の入札仕様書に「大震災の影響による臨時休館の期間において、施設が復旧し通常どおり開館するまでの間の常駐者は非常勤とし、委託者の要請に応じ勤務する形に変更することができる」との特記事項が追加されていた劇場がありました。

早い話が「劇場が復旧するまで来なくていいよ。必要があったら呼ぶから、来た分だけギャラ払うね」ということですね。一体、それはいつまでか解らない段階の時です。

震災にあった自治体はどこも経済的なダメージがあった訳ですが、委託業者の立場からするとイベントなどの現場がなくなった上に、安定収入が見込める小屋付き業務がなくなって死活問題でした。

これは、劇場技術者が「舞台の技術的な操作をする人」つまり「催事がある時にいればいい人」との認識から来ています。「舞台技術管理者」としての地位を確立していかなければ、震災に限らず安定的な労働条件を生み出すことはできないでしょう。

劇場には「施設管理者」と「舞台技術管理者」が協働することによって機能するような仕組み作りが必要です。特に「地方の劇場において」という条件がつくかもしれませんし、私の個人的な考え方なので「その先の影響」まで熟慮できていませんが、「劇場技術者が売る物」を明確にしていく必要があるでしょう。

■「日本の文化」について考えたこと 群馬県 平野 克明

東日本大震災とその後の原発事故に、大きな衝撃を受け、日本の将来について憂いました。自分では、何ができるのかを考えたとき、公共の劇場に勤めていることから、「日本の文化」に役立つことをすべきだとおぼろげに思っていました。具体的な行動にはつながっていませんでした。

そのような中で、日本劇場技術者連盟のつながりで、職場に八板賢二郎副理事長と滝善光理事をお迎えして技術研修会を開催することができました。ここでは、日本の伝統芸能である雅楽、能、浄瑠璃、歌舞伎、長唄などの特徴や歴史などを学ぶと共に、劇場での具体的な舞台装置・設備のセッティングなどについても、実践的に使える技術をスパイスの利いた裏技と共に教えていただきました。連盟主催の講座でもご存知の通り、お二人は、日本の伝統芸能の催事に深く関わってお仕事をされてただけに、経験に裏打ちされた深い技術と知識を持っておられ、その講義、実技共に大変有益なものでありました。

この研修を通じ、日本の伝統芸能の素晴らしさを感じると共に、このような芸能を大事にしたいという思いがさらに強くなりました。そして、私たちは、そのような芸能のみならず様々な催事を裏方として支える素晴らしい仕事ができることを再認識しました。つまり、日々の技術者としての仕事を精一杯やることが、「日本の文化」振興に役立つことだと理解できたのです。

遅まきながら、初心に返り、「日本の文化」について勉強し、小さな単位から新たな事業展開に取り組むなどして、劇場を使われるお客様に還元してきたいと思います。

■裏方教養講座「日本の音楽と西洋の音楽」の報告 群馬県 平野 克明

2012年1月30日（月）に、東京都の新宿文化センターにて、当連盟主催の技術者向け裏方教養講座「日本の音楽と西洋の音楽」が開催された。

第1部「日本の音楽」は、当連盟の八板賢二郎副理事長が行った。

内容としては、日本の音楽を古代、中世、近世の時代に分類し、演奏で使用する楽器、その音楽の特徴はもとより、発生の背景や歴史についても、判りやすく丁寧に説明していただいた。

以下に、古代の音楽に分類される「雅楽」についての一節を紹介する。

「雅楽は、日本古来の歌と舞、古代アジアから伝来した器楽と舞が日本化したものやその影響を受けて創作された音楽である。現在の形になったのは平安時代中期（10世紀）である。主に宮廷や貴族社会、または有力な社寺などで演じられてきたが、現在は宮内庁内で伝承されているものが基準となっている。そして、国風歌舞（くにぶりのうたまい）・歌物（うたいもの）、そして大陸から伝来した楽舞（がくぶ）の三種類がある。そして、楽舞は、演奏だけのものを「管絃（かんげん）、舞が伴うものを「舞楽（ぶがく）」と呼ぶ。さらに、中国方面から伝来したものを左方（唐楽）、朝鮮方面から伝来したものを右方（高麗楽）と区別している。」

このような学術的な説明と共に、深い経験に裏打ちされた音響技術者ならではの、現場でのSRのコツやノウハウなども織り交ぜて説明していただいた。

たとえば、箏曲などのSRでは、ピンマイクを仕込むときに毛氈と同じ色のスポンジで包み込み目立たないようにする、また、屏風を反響板として利用するなどというノウハウは、実務において実に参考になる。また、能舞台の床下に設置されている甕は、音を反響させるものではなく、足拍子で出る低音を吸音して、ほどよい音にするフィルターとしての機能を果たすものであるとのこと。非常に興味深い事実であった。

第2部「西洋の音楽」は、明治座舞台管理営業部長の三好直樹氏が行った。西洋の音楽の発生から、その発展の歴史をその時代の音楽を取り上げながら体系的に、しかも凄まじい情報量をもって説明された。氏の西洋音楽に対する造詣の深さに脱帽した。

西洋では、やはり、キリスト教が音楽の発展に大きな役割を果たしていたことがよく理解できた。たとえば、古くは、教会の聖職者が主に文字の読み書きができたことにより、楽譜が伝承され、結局は音楽も受け継がれていったのだ。また、教会の中で歌われた聖歌などの果たした役割も看過できない。

その他、宮廷音楽や大編成化していく西洋音楽の歴史やその背景なども興味深かった。

そして、最後に技術者として「クラシック音楽の演奏会ですべきこととしてはいけないこと」を教えていただいた。これは、緊張感のある現場では大変役に立つことであった。たとえば、演奏後の譜面の載っている譜面台には決して触ってはならないそうだった。譜面はライブラリアンが片付けるものであり、その順番が決まっている。したがって、技術者が勝手に片付けてしまうと、順番が狂い次の演奏会にも支障が出ることさえあるそうだった。

以上のように内容そのものも素晴らしかったが、今回の二つの大きな試みも特筆すべきものであった。

ひとつは、Ustreamを使い、講演をライブ中継したことである。これにより、会場に来られない会員や興味のある方にも聴講していただけたことである。今後も継続できれば、地方で講座を受けることによるメリットが少なかった方も、入会を躊躇することはなくなるだろう。これを契機に、ぜひ、日本劇場技術者連盟に入会をお勧めしていただきたい。

もうひとつは、講師の方が時間をかけて準備した貴重な音源を用いて、説明されたことである。これにより、言葉や図では容易に説明できないことが、単純明快に理解することができた。

最後に、劇場技術者も催事の技術的な面だけでなく、その扱う芸術的な要素、背景や歴史を理解すると共に、「楽しめる」ように、様々な分野の芸能や芸術に触れていくべきだと感じた。当然のことながら、技術者が楽しめるほど催事の真髄を理解していれば、その内容も素晴らしいものになり、それが観客にも伝わるからである。

● 交流会

恒例の交流会も開催され、講座に参加された殆どの方が来られ大変盛り上がりました。

参加者は、連盟会員のほかに、埼玉県舞台技術協議会、日本音響家協会を始め、機材協力された業者の方、出版社の方もおられ、実に幅広い分野の方々と情報交換ができます。そこでは、実際に劇場で使える実践的な技術や知識を得ることができます。たとえば、私もこの交流会で、「コントロール・スポットライト」の存在を知り、その活用方法について調べてみたいと思っています。

そして、何より重要なことは、様々な分野の方とざっくばらんに会話することにより、お互いにうち解け、穏やかな大人の人間関係を築くことができることです。これは、非常に大きな財産となります。

講座に参加される方は、ぜひ、交流会も楽しんでいただきたいと思います。

連盟会員の新鮮便

■ネットの活用 北海道 坪田 栄藏

私はパソコンやインターネットには結構明るい方で、自身で簡単ですが、早くからホームページも作っていました。しかし Facebook や Twitter などのいわゆる SNS というものには、どういう訳か手を出していませんでした。

ところが連盟が Facebook で情報を流すことになったことから、軽い気持ちで会員登録したところ、技術者検定講座でお世話になった方を中心に、役員の方々からも「友達リクエスト」をいただきました。普段合う機会の少ない全国の多くの方々とネットを介した交流ができるようになり、すっかりハマリ込み、とても楽しい日々を送らせていただいています。

先日は裏方教養講座「日本の音楽、西洋の音楽」が Ustream で配信され、時間の都合で一部でしたが、観させていただきました。とても興味ある内容でしたので本当は直接参加したかったのですが、前後の日程の関係で、参加は叶わず残念に思っていたところですが、このようなネット配信は地方会員にはとてもありがたいものでした。

やはり、講座といえども直接その会場にいるライブ感には叶いませんが、代替措置としては有効な方法と思います。また、離れている会員と連盟を近く感じさせてくれます。そして、本当は「地方会員は中々参加できません」などと言わず、自ら事業を企画しなければならなかったところも正直な気持ちです。

最後になりましたが、このネット活用という意欲的な取組みをしていただいたみなさまに感謝いたします。私もがんばらなくては。

■小劇場演劇の表現者たちに拍手 東京都 八板賢二郎

日本演出者協会広報誌「D」で、小劇場演劇で活躍している作家で演出家の鴻上尚史氏と演出家のペーター・ゲスナー氏が対談をしています。

小劇場演劇が社会現象になっていた 80 年代は今と何が違うか、劇場と社会を結ぶ劇団の役割とはなどを語っています。

その一部をご紹介します。

鴻上 “略—演出家が大学の先生や講師になると年に 150 万もらう。実に微妙なところにいる。ぼくらが 20 代とか 30 代とかのころは自分で稼がないとゼロだったわけで大学の講師なんて職業があるとは夢にも思わなかった—略—あまりにもインテリの若手演出家が大学の非常勤講師で小遣稼いでますっていう現象が増えてくるとまずいね。俳優側から文句出てくると思うんです。つまり、お前はいいよ、と。お前は 30 代になって、そこそこシンポジウムでしゃべれる人間になってね、大学の講師という道があるかもしれないけど、俺たちはどうすんだよっていう。—略—”

ゲスナー “演劇の世界で王様はじつは役者じゃないですか。でも現実的にはそうじゃないですね。日本の中で、王様はプロデューサーじゃないかを感じているんです。ぜんぶプロデューサーが決めている。プロデューサーに見てもらわないといけな。聞かないといけな。演出家として役者と関係を作りたいと思ったら、その前にまず役者はプロ

デューサーの方にゴマすりをやったりで、ぜんぜん普通の関係を作れない”

鴻上 “略--ヨーロッパの演劇だって、キャメロン・マッキントッシュじゃないけど、プロデューサーが帝王なんじゃないの？”

ゲスナー “ドイツはチョット違うね。理想的には役者ですけど王様は演出家ですね。でも公立劇場の中で役者も毎月お金もらっているから、さっきのような虚しさ、このさきどうなるのみたいなふうになっていない。でもたぶんイギリスとか、あなたの言うとおり。--後略”

この他に、岩手県演劇協会会長の坂田裕一氏が書いている「ホールが無くて芝居はできる」から、元気が貰えます。

”岩手のホールは壊滅的な被害を受けた。陸前高田市、釜石市、宮古市、再建の目処は立たない。(中略) ホールができる前から芝居はあった。好きだからやるのだ。大げさに考えることはない。今ある姿でありのままで芝居をやる。釜石の劇団・青い海は、かろうじて被害を免れたホテルの宴会場で芝居をやる。麦の会(宮古市)は幼稚園の多目的ホールで上演する。そうだ、我々は知らず知らずの内に、公立ホールに依存していた。芝居を行うところが劇場である。我々はあらゆる空間を劇場としなければならない。”
この力強い姿勢に大喝采。

20 ページの広報誌ですがとても充実していて、さすがに表現者たちの団体！と感心しました。

■視点 福井県 山下 祐治

最近感じていることですが、同じものを見てもそれを素通りするか、何かを感じて行動に移すか、というのはその人の目、視点によるものだと思います。例えば舞台袖周りでゴミを見つけたとしても素通りしたり、必要ではない電灯が点いていても何にも感じなかったり。人それぞれで良いのでしょうか、小さなことを見逃していると大きなことにも気づけなかったり、大きなミスをしてしまったりということにつながるように思います。

特に舞台周りは危険がいっぱい。いつも勤務する自分たちは慣れているけど利用者は初めて、もしくは久々に利用する方ばかりです。常に危険察知の視点を持って勤務したいと思います。

イベントのお知らせ

劇場技術者寺子屋「舞台監督の仕事を学ぶ(演劇編)」

「舞台監督の仕事とは」「日本の舞台監督の現状は」「海外の舞台監督の現状は」を、第一線で活躍する旬な舞台監督が解き明かす。

日 時：2012年4月16日(月) 14時～16時30分

会 場：新宿文化センター 和会議室

定 員：40名(定員になり次第〆切)

受講料：2,000円(学生1,000円 主催・共催の会員・会友は無料)

講 師：大木玉樹氏、藤崎遊氏

申込先：teec.honbu@gmail.com またはFAX. 042-361-8982

主 催：日本劇場技術者連盟

共 催：埼玉県舞台技術協議会

連盟からのお知らせ

■日本劇場技術者連盟ホームページの URL が変わりました。

新しい URL → <http://www.teec-or.com/>

■「日本劇場技術者連盟ラウンジ」が Facebook に登場

Facebook に日本劇場技術者連盟のページが、「日本劇場技術者連盟ラウンジ」として作成されました。気軽に書き込みをして、交流を深めましょう。

まずは、連盟ウェブサイトのトップページから「日本劇場技術者連盟ラウンジ (Facebook で交流)」をクリックしてください。

■メールアドレスの登録のお願い

「幕内瓦版」などの送信のため、皆様のメールアドレスが必要です。まだ、登録されていない方は、メールアドレスの送信をお願いします。経費の節減になりますので、是非ご協力ください。なお、皆様からの情報は、連盟の運営以外での利用はいたしません。

送信先アドレス → teec@pure.ocn.ne.jp

■会費納入のお願い

連盟の健全な運営のために、未納の方は、会費の納入をお願いします。

年会費 2,000 円の納入先は下記の通りです。名義は、「日本劇場技術者連盟」です。

◎郵便振替番号 00180-7-540744 (郵便局窓口で払込)

◎会費振込銀行 三菱東京UFJ銀行 練馬平和台支店 普通 0460959

■ご意見・ご要望をお寄せください

連盟運営改善のために、皆様からのご意見や要望をお寄せください。連盟のここが不満である、このようなことをして欲しいということを下記のメールアドレスまでお願いします。もちろん、当瓦版への投稿も、随時お待ちしております。

送信先アドレス → teec.editor@gmail.com

発行：日本劇場技術者連盟 発行人：齋藤 譲一 編集人：平野 克明 発行日：2012年3月5日

編集委員：阿部喜一・小松正俊・桑原基弘・庄司 至・増田哲也・山下祐治